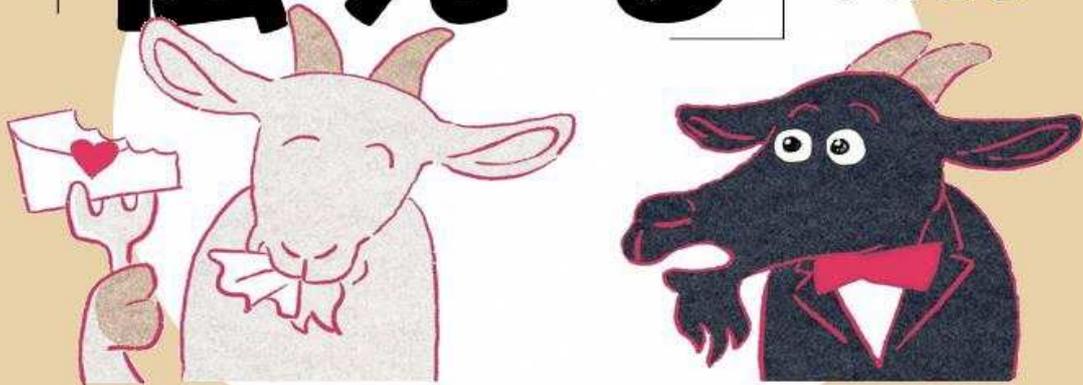


すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム
つながる地域のボランティア
～心を伝えあえるまち～
令和元年7月6日(土)

つながる地域のボランティア
～心を伝えあえるまち～

伝える

を考える
ひととき



課題を抱えていることで
地域の中で孤立しがちな方々に
どうすればメッセージが届くでしょう？
思いを伝えるために自分にできることは何かを
みんなで一緒に考えます。

入場無料

すみだ地域福祉・
ボランティアフォーラム



【主催】すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会 墨田区 社会福祉法人墨田区社会福祉協議会

令和元年7月6日 13:00～16:30 開場12:00

- 講演 思いを伝える
～災害ボランティア活動の現場から～
講師 高山 弘毅氏 (群馬県棟東村社会福祉協議会)
- 分科会
地域で共に生きていくために ～私にできること～
 - ・障害のある方とのコミュニケーション
 - ・やさしい日本語がつながる多文化共生社会
 - ・地域福祉は伝えあう思いから

すみだリバーサイドホール
墨田区吾妻橋1-23-20 ……………▶

● 参加申し込み 所属・氏名を
裏面の参加申込書あるいは電話
にて7月3日(水)までに下記申し
込み先へ

● 墨田区福祉保健部厚生課
☎03-5608-1163 FAX03-5608-6403

● すみだボランティアセンター
☎03-3612-2940 FAX03-3610-0294





参加申込書

●以下の内容にご記入いただき、7月3日(水)までにFAXまたはEメールでお申し込みください。

名前	所属団体名(個人の方は記入しなくて結構です)	
参加希望の分科会に○をつけてください		
1 障害のある方との コミュニケーション	2 やさしい日本語がつなぐ 多文化共生社会	3 地域福祉は 伝えあう思いから
一時保育(1歳～就学前まで)及び手話通訳を希望する場合は7月3日(水)までにお申し込みください。		
どちらかに○をつけてください	1 一時保育希望(お子さんの年齢 才)	2 手話通訳希望

●墨田区福祉保健部厚生課 ☎03-5608-1163 FAX: 03-5608-6403 Eメール: KOUSEI@city.sumida.lg.jp
 ●すみだボランティアセンター ☎03-3612-2940 FAX: 03-3610-0294 Eメール: vc@sumida-shakyo.or.jp

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム

プログラム

13:00 オープニング

13:10 講演

思いを伝える

～災害ボランティア活動の現場から～

地域の中で「自分にも何かできることはないかな」と思ったこと、ありませんか? 地域には高齢の方、障害のある方、外国から来た方、子どもたちなど、いろいろな方が暮らしています。ボランティアコーディネートのプロとして人と人をつないできた経験から、地域のつながりやボランティア活動において大切なことを「思いを伝える」という視点からお話しいたします。

講師

●高山弘毅(たかやまひろき)氏

群馬県榛東村社会福祉協議会
 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議委員



【講師プロフィール】

前橋市社会福祉協議会、フリーコンサルタント等を経て現在群馬県榛東村社会福祉協議会職員。長年災害ボランティアに携わってきた経験を生かし、個人事務所「Nukiito」を立ち上げる。「平時から暮らしやすい地域像を目指すことが、災害時の被害軽減にもつながる」と話す。

14:10

分科会

(2時間程度) 場所: ギャラリー・会議室など

地域で共に生きていくために

～私にできること～

発表会

16:10～



<分科会テーマ>

1 障害のある方との コミュニケーション

「墨田区手話言語及び障害者の意思疎通に関する条例」が施行されました。様々な障害のある方の現状を知り、誰もが心を通わすための関わりについて一緒に考えます。

2 やさしい日本語がつなぐ 多文化共生社会

我が国を訪れる外国人観光客のさらなる増加や、外国人労働者の増加も見込まれています。

墨田区でも、地域で生活する外国の方が増えています。そこで、外国の方やその子どもたちが暮らしやすいコミュニケーションのあり方について一緒に考えます。

3 地域福祉は 伝えあう思いから

認知症の方、ひきこもっている方、子育てで悩んでいる方など、地域には課題を抱えている方たちがいます。地域の中で自分たちに何ができるのか、コミュニケーションを視点と一緒に考えます。

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムが7月6日に開催されました

概要

1 趣旨

墨田区における地域福祉の推進とボランティア活動への参加促進を図るため、民生・児童委員、ボランティア活動者、小地域福祉活動参加者、福祉施設・福祉事業者など地域福祉とボランティア活動の関係者や活動に関心を持つ者等が一堂に会し、地域福祉・ボランティア活動について一緒に学び、考え、交流し、広く活動への参加を呼びかける。

今年度は「つながる地域のボランティア ～心を伝えあえるまち～」をテーマとした。

2 日時

令和元年7月6日(土) 13時から16時半まで

3 場所

すみだリバーサイドホール

4 内容

(1) 講演

「思いを伝える ～災害ボランティア活動の現場から～」

講師

高山弘毅氏(群馬県榛東村社会福祉協議会)

(2) 分科会

障害のある方とのコミュニケーション

やさしい日本語がつなぐ多文化共生社会

地域福祉は伝えあう思いから

(3) 発表会・講評

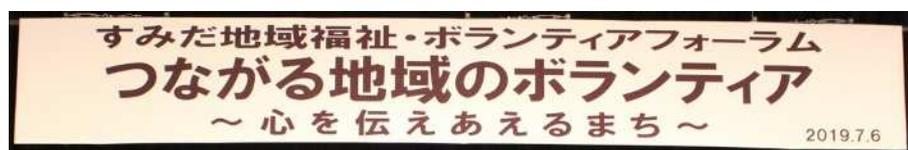
5 主催

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会

墨田区 墨田区社会福祉協議会

6 来場者数

約200名(関係者含)



講演 「思いを伝える ～災害ボランティア活動の現場から～」

長年災害ボランティア活動に携わってきた経験から、地域のつながりやボランティア活動において大切なことを「思いを伝える」という視点から、高山氏にお話していただきました。



高山弘毅氏
(群馬県榛東村社会福祉協議会)

**災害ボランティアセンター運営支援で
各地にお邪魔しています。**

ボランティアセンター運営に関わった災害

2007: 中越沖地震

2011: 東日本大震災、新潟福島豪雨

2012: 九州北部豪雨

2014: 関東豪雪、広島土砂災害

2015: 北関東豪雨

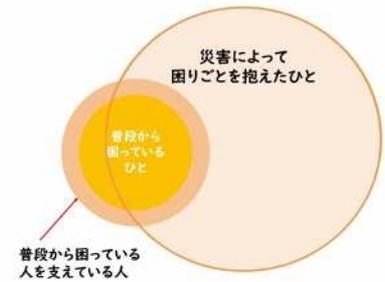
2017: 九州北部豪雨

2018: 大阪北部地震、7月豪雨

【講演概要】

1 困りごとのおはなし

地域には普段から困りごとを抱えている人がたくさんいる。たとえば、買い物や通院、ゴミ出し、子育て、炊事洗濯、銀行口座の管理や公共料金の支払いなど。災害時にはこれに加えて、物資の不足や衛生状態をはじめとし、災害由来の困りごとが一気に増える。5年前に群馬県で大雪が降った際には、透析に行けなくて困っている人がたくさんいた。また前橋市内だけでカーポートが約2,000棟倒れてしまい、これによって買い物に行けなくなってしまった方が大勢いた。災害が起きると、こういった困りごとが一気に増える。なぜなら普段は誰かを支えている人も同じように被災して困りごとを抱えてしまうからである。これを地域の中だけで支えあうとなかなか厳しい。そこで災害ボランティアセンターの出番となる。災害ボランティアセンターは近隣住民による助け合いが機能しないところをボランティアの力を借りながら、復旧・復興に向けて被災者が自立・生活再建することを目指す場所である。災害ボランティアと聞くと、スコップを持って、泥かきや瓦礫の片づけをしている姿をイメージする方が多い。泥かきや瓦礫撤去の困りごとを抱えた方がたくさんいるのも事実だが、被災地ではそれ以外にもさまざまな活動が行われている。たとえば被災者の話し相手になってあげたり、炊き出しをしたり、足湯の準備をしたり、勉強の手伝いをしたり、子どもの遊び相手になることなど。その他にも避難所から仮設住宅への引越しの手伝いや情報発信支援などその内容は多岐にわたる。災害ボランティア活動は分野ではない。普段子どもたちと関わっていれば、子どもたちがどういう状況にあるのか、外国人の方と関わる活動をしていけば、その方々がどういう状況にあるのか。「普段のボランティア活動」に対置される「災害時のボランティア活動」である。だから、皆さんそれぞれが災害時にできることがあるはずである。



(2011年 福島)



(2018年 広島)

被災地の状況を見ると、大きな災害だからみんな困っているに違いないと思う。しかし実際現地に行くと、こういった状況でも、人の助けを借りずに自分で何とかしたいという人が多い。人に助けを求めるのはとても大変なことである。日常の中でたとえるなら、電車賃が足りなかったときに見知らぬその辺の人に「ごめん、10円貸して」って言えますか？「貸す側」にとっては大したことなくても、「借りる側」にとっては大きなハードルなこともある。災害時でもこうし

た気持ちが生じるのが当然である。支援者は支援したいが、支援されたい人は案外少ない。また困っている人が困っていることを正しく伝えてくれるとは限らない。その人の気持ちを自分がそのまま理解することは難しいかもしれないが、あなたの気持ちをわかろうとする、その姿勢が大切である。「伝える」とときには、伝える方向だけではなく、その人がどう思っているのかということをお大事にしてあげることが非常に大切である。

2 情報発信はコミュニケーション

SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)は、人と人との繋がりを促進するインターネットのページである。現在 Facebook やツイッター、インスタグラム等さまざまな SNS が存在する。私たちはこの SNS を通して住んでいる地域で繋がったり、趣味で繋がったりすることができる。なぜ災害の現場で SNS が注目されるのかというと、「共感」「双方向」のメディアだからである。発信したことに対して、共感をしたり、情報を直接伝えたりすることができる。共感に基づいて人は動く。体験を共有すると共感が高まる。地域福祉でも SNS と同じことが言える。

数年前に「前橋部」という活動を始めた。部の中に自分の好きな言葉を入れ、それに共感した人たちが参加できるというもの。敷居の低い言葉で誰でも発足、参加できるが、ターゲットはあくまでも前橋で生活をする普通の人たち。ビール部や葡萄酒部など部活の数はどんどん増え、130を超えるほどになった。共感と参加が盛り上がり、上毛新聞や NHK の番組等で取り上げられた。そんな中、前橋市で大雪が降った。「前橋いっせい雪かき大作戦」というキャンペーンを行ったところ、雪かきをしてくれる人が大勢集まった。そしてその中に、「前橋部」の人が多くいた。部の中には、携帯電話会社に勤めているので、携帯電話を無償提供してくれる方、運送業をやっている方、物資を運ぶためのトラックを提供してくれる方などが多数いた。彼らは災害時にも普段と同じように共感と参加をしてくれた。



東日本大震災で福島県にお邪魔していた時、福島県富岡高校が全国高校サッカー選手権大会の出場を決めたが、ユニホーム購入費等の資金が集まらずに困っていた。そこで「福島県富岡高校勝手に応援団」を立ち上げ、インターネットで支援を募ったところ、目標額を大きく上回る協賛金が集まった。

これらの話から分かることは、出番を待っている人がたくさんいるということ。自分から言うのは恥ずかしいけど、求められたら協力することが好きな人もたくさんいる。肉声を伝え、共感を得るとサポーターも増えていく。情報発信は参加機会の提供でもある。難しいことがあれば悩み、意見に向き合う姿勢を見せることが大切である。また広く正確に伝えるだけでなく、返ってきた反応に真摯に対応し、気にかけている姿勢を見せることも大切である。

3 災害時に大切にしたい考え方

「泥を見るな人をみよ」

被災地で70代女性のお手伝いをしていた。その自宅は津波の被害に遭い、壊さざるを得なくなってしまった。家を壊す前に、家財をすべて外に運び出してほしいというのがその女性の依頼であった。ほかのボランティアと協力し家財を外に運び出していたときのこと、ふと気が付くとその女性が泣いていた。気にかけてながらも作業を続けていた時、津波の被害を免れ、か

ろうじて残っていた家の柱に傷だらけの柱があった。それは子どもの成長を記録したものだ。その女性は若い頃に息子を亡くし、その後夫を亡くし、その家に一人で住んでいたという。その家を壊すということは、ご主人や息子さんとの思い出をすべて捨てなければならない。僕はただ一生懸命に作業をしていたが、家族との思い出の詰まった家財を壊され、捨てられていた女性の気持ちはどんなだったのだろうかと考えた。

自分たちのやるべきことは、泥を見て必死に作業をすることではなく、支援している方々がもう一度前を向けるように支えてあげることだということを改めて気づかされた。

災害の現場だけでなく、皆さんの普段の活動にも「泥を見るな人をみよ」という言葉を当てはめて考えることができるのではないだろうか。

第1分科会 障害のある方とのコミュニケーション

参加者：49名

場所：すみだリバーサイドホール



【概要】

施設の方、聴覚障害のある方、家族の方などから、普段の生活の中で困っていることなどをお話しいただいた後、参加者の皆さんで意見交換や質疑応答等を行いました。障害のある方とのコミュニケーションでは、時間をかけて丁寧な対応を心がけることが大切であるとのお話がありました。

【内容】

1 登壇者の話

(1) はばたき福祉園 堀越氏

区内人口の約0.6%の人が「愛の手帳」を持っている。当施設では中度(「愛の手帳」2度)の利用者が最も多いが、同じ中度でもコミュニケーションのレベルは個人により異なる。自分の意思を表現できない人・自分の意思とは反対のことを表現してしまう人に対する関わり方が難しい。支援する立場として、「本当のことはその人じゃないとわからない」という考えの下、時間をかけて関係を築くことを大切にしている。国土交通省が「知的障害、発達障害、精神障害のある方とのコミュニケーションハンドブック」を発行しているので、参考にしてもらいたい。

(2) 聴覚障害者 荘司氏

2歳で障害を患ってから中学校を卒業するまで、耳に障害を持つ児童が通う「ろう学校」に通っていた。当時ろう学校では手話を使うことを禁じられており、それは学校内だけでなく、家庭内でも禁じられていた。「口話教育」を受けたが、家族との意思の疎通もうまくできず、重要な場面では筆談をしていた。現在では手話が「母語」であり、手話が通じない場合は筆談をしている。日常生活では、タイムセール放送が聞こえない、駅の構内放送が聞こえない、ATMの非常通話が使えない、マンションや会社入口の電話対応ができないなど不自由を感じ

ることが多い。

(3) 墨田区精神障害者家族会 三浦氏

姉と弟が統合失調症であったことから、精神障害のことを多くの人に知ってもらいたいという思いで家族会を立ち上げた。その後、家族会の中で「障害者のために何か始めるべきでは」という意見があり、昭和55年に「隅田作業所」を立ち上げた。区内ボランティア団体（「ふれあいベルすみだ」「まないたサークル」等）からの協力を得ながら障害者支援に携わっている。利用者や家族と接する際には、話を聞き、相手に共感することを大切にしている。

2 参加者からの感想・質問等

聴力障害を持つ人と、どうすれば意思の疎通がうまくできるか

丁寧に時間をかけること。表情も重要。あせって強い態度に出ると関係が壊れてしまう。

障害を持つ人は、本当は話しかけられたいと思っているが、自分から前に出ることができないことが多い。障害者に対して挨拶は積極的にするように伝えている。必要な情報は筆談で教えてもらえるとありがたい。

障害のある人とのコミュニケーションの取り方について学ぶことができた。

こうした取り組みにより声を掛け合う機会が多くなり、小さなところから助け合える社会になることを願う。

聴覚障害者は、障害を持っていることを周囲に知らせるためのマークなどを身に付けているのかどうか。また電車内の液晶ディスプレイには、CMだけでなく、事故時の情報などを表示するよう鉄道各社に働きかけたらどうか。

カバンの中に「災害時支援バンダナ」と笛を入れている。また、「手書きアプリ」を使用するため、スマートフォンを携帯している。

聴覚障害は、障害があることが周囲に伝わりにくい。バスの中には筆記具が備え付けられていることが多いので積極的に活用してほしい。

本日岐阜から参加した。土地勘のない場所でも何人もの人に聞きながら会場にたどり着くことができた。勇気をもって気持ちを伝えることが大切だと思う。

○いつもバックに、メモ用紙とサインペンを持ち歩いている。シャープペンやボールペンは細かい字で読みにくい場合があるので、サインペンが良い。



【概要】

にほんご教室を通して外国人の支援を行っている方や、実際に日本で暮らす外国の方々からお話を頂いた後、いくつかのグループに分かれて、「文化や言葉の違いを超えて、みんなが暮らしやすい地域の工夫」について話し合いました。

【内容】

1 登壇者の話

(1) にほんごボランティア21 松本氏

墨田区では1992年に初めて日本語ボランティア講座ができた。そのころ3つもボランティアに関わっていたので家でも風当たりが厳しかったが、やってきた。その後、国際交流のイベントに参加したり、お国自慢の料理を出し合ったりと、人と人とのかかわりを大事にしながら普段ゆっくり聞けない話を聞いた。外国人の方は孤独を感じている。日本人の友人を作ると良い。これからは助けあって生きていかななくてはならない時代。コミュニケーションをとるには「やさしい日本語」が必要。「やさしい日本語」は優しいと易しいが両方合わさった言葉である。今までは「教えてあげる」という気持ちだったかもしれないが、これからは日本社会を支えてもらっているという気持ちを持って接したい。

(2) 鬮さん(中国)

日本に来て3年になった。ビジネスビザで来日した。日本の夜がさみしかった。一番困ったことは、電話がなかったこと。何の申込みをするにも電話番号が必要で困った。電話の申込みをするのにクレジットカードが必要。クレジットカードに申込みをするのに電話が必要。これではどちらも申し込めなかった。日本は子どもの福祉が良い。今は、家で勉強できる時間もあるので、楽しんでいる。一人でさみしくて鬱になりかけたが、日本語教室があって、とても楽しかった。

(3) 宋さん(中国)

中野区に9年住んだあと港区に住み、その後墨田区に来た。やはり、一番困ったのは言葉だった。近所の方がとても親切で助かった。「洗濯機いる？」と聞かれて、「いる」???「いる」はいろいろな意味があってわからなかった。近所の方に、勉強会に連れて行ってもらった。紙に書いてポケットに入れて覚えるようにした。今は、自分が外国人の方のために何かしたいと思っている。日本の文化が大好き。日本語教室は素晴らしいので、地域貢献したいと思っている。

(4) 相原さん(モンゴル)

日本人の男性と結婚し、モンゴルから日本に来て15年になる。日本に来てすぐ出産をしたので、たいへんだった。病院で子どもの状態を伝えられないダメなお母さんだと思った。夫だけが頼りだった。墨田区に来てさみしくてしょうがなかった。ひきこもり状態になったこともある。幼稚園からのお手紙も、夫がいないとどこが大事なことなのかわからなかった。娘が大きくなって「自分がお母さんを助けてあげる」と言われて、またダメなお母さんだと思った。そんな時錦糸町のママチームを知り、自分にぴったりだと思った。ほかのお母さんたちと会話ができるようになり、仲良しの人もできた。でも、敬語がむずかしい。敬語で言われると自分のことを敬語で返したりしてしまった。今はふりがなのある「子ども新聞」を読んでいる。ラジオも聴いている。ほかにも同じような人がいると心強く思う。日本には漢字、片仮名、平仮名がある。全部平仮名だといいと思う。自分はこれから日本とモンゴルの懸け橋になりたい。

(5) 墨田区役所文化芸術振興課 南部課長

墨田区に住んでいる外国人の方は10年前より3割多くなっていて、母国は90カ国以上となっている。多言語対応には限界があり、今は「やさしい日本語」に取り組んでいる。外国人の皆さんが話せるのは「母国語」以外では「日本語」という方がほとんどである。対応にもやさしい対応が求められている。

2 グループディスカッション

最近、日本語を教えてほしいという電話が多い。しかし、ボランティアをしてくれる人が増えない。地域の方にもわかってもらいたい。英語や中国語等が話せなくても、ボランティアはできる。少しでも日本語を教えたいという人がいたら、すみだボランティアセンターや行政に連絡してほしい

ゲストハウスでボランティアをしているが、言葉は通じなくても折り紙で気持ちは通じる。気持ちは大切。

ボランティアをやっているが、難しいのは外国人が通い続けられないこと。

以前と比べたら、教育環境は良くなっており、学習意欲もある。ボランティアがもっとできて、困っている外国人を助けてあげられ、相互交流ができれば良い。

ある地域では工場で労働者となっている外国人が多かったが、ボランティアの存在を知らなかった。

留学生や生活者等、それぞれ事情が違うので、支援の使い分けが必要。押しつけではなく、聞いてあげることが必要。

全てを支援者1人でやろうとはせず、周りと一緒にサポートすると良い。

日本人との接点をきらう勤務先や、実習生もいるし、そもそも情報をキャッチできない人もいる。

外国人の子の中には、日本語ができないことで勉強せずに遊び歩いている子もいる。

日本語がわからない人にも地域で暮らせるようにしてあげたい。

子どもは、髪の色や肌の色の違いでいじめられることがある。

夏休みに来た中国人の子どもは、言葉がわからないため児童館の利用ルールがわからなかったが、やさしい日本語で話をすることで対応できるようになった。

経営者から、外国人労働者に日本語を教えてほしいと頼まれ、企業内で教えている。

ゼロベースの外国人には難しいが、難しい言葉は使わない、長文ではなく複数の短文にする、といった全てやさしい日本語を使って説明するのが良い。



【概要】

少子高齢化、人生100年時代等、私たちを取り巻く状況を学んだ後、ご近所での助け合いをワークショップで体験。最後に受援力やコミュニケーションについて学び、参加者から地域での助け合いや受援力について様々な意見がでました。

【内容】

- 1 登壇者の話 墨田区社会福祉協議会 小古山氏
「なぜ地域でのお互い様の助け合いが必要なのか」

(1) 背景と現状

今、人生100年時代と言われている。少子高齢化、家族の形態や地域の状況の変化は著しく、単身高齢者、高齢者のみ世帯も急激に増加している。認知症、引きこもり、子育てなど、地域には課題を抱えている方や、手助けを必要としている方も多く、新聞やテレビのニュースなどで報じられているように孤立死や虐待につながる場合もある。人が地域の中で孤立した時に、誰にも助けを求められないことも原因の1つではないかと考えられる。

(2) 4つの「助」

- 自助・・・自分で自分を助けること
- 互助・・・家族、友人、地域住民同士がお互いに助け合うこと
- 共助・・・制度化された相互の負担で成り立つもの
- 公助・・・自助・互助・共助では対応できないことを行う社会福祉制度

ここで、地域の中で助け合いを広げていく前提として、この順番をふまえることが重要となる。公的な制度の限界を助け合いで補うのではなく、自分自身が助け合いでできることは行って、できない部分を公的な制度で補うことが大切である。今日は、互助について皆さんと考えていきたい。

2 助け合い体験ゲーム

(1) 自己紹介

1人1分間の持ち時間で、自己紹介を行う。



(2) ゲーム内容の説明

色分けされた60種類のカードから、自分が助けてほしいカードを3枚選び、グループのメンバーと交渉する。自分や参加した人たちの「できること」「してほしいこと」を出し合うことによって、気付かなかった能力やニーズに気付くことができたり、助け合いのうれしさや楽しさを実感できる。また、「助けて」と言える事の大切さや難しさに気付く体験ゲーム。最終的に残ったカードで自分が「助け上手」か「助けられ上手」かの傾向にも気付くことができる。

(3) カードの色及び内容

青・・・手軽な手伝い（ゴミ出し、マッサージ、留守番等）

ピンク・・・家事全般（洗濯、アイロンがけ、買い物、食事作り等）

紫・・・交流（話し相手、一緒に体操する等）

赤・・・送迎や外出の手伝い（旅行時の付添い、一緒に墓参り、通院の送迎等）

オレンジ・・・趣味、特技を生かす（包丁研ぎ、ヘアカット、日曜大工等）

茶色・・・紹介、相談、情報提供

緑・・・重たいサービス（入浴介助、排せつ介助、食事の介助等）

(4) ゲーム後の感想、振り返り

助けてほしいと言うときは、具体的に伝えることが大事だと思った。

仕事をしているので、自分ができることは一時的なことが多かった。

助けられる側にも練習が必要だと思った。

もらったカードを見て、自分の特技や得意なことに気付いた。

自分にもできることがあるとわかった。

こんなことを頼んでもいいのかと思うようなものでも、頼んでみるものだと思った。

家族から地域へと意識的に広げていけるか考えることができた。

得意分野が皆ばらばらで、面白かった。

助け上手になれるようにしたい。

日頃の近所づきあいやコミュニケーションが大切だと思った。

始めはハードルが高いと感じたが、少し下がった気がした。

一步踏み出すことが大事だと感じた。

6～8名いると、なんだかんだで小さな問題は解決ができるんだなと思った。

実際の地域でこういうような関係性を作れるかが大きな問題となる。

普段からご近所付き合いがないと支えあいの一步を踏み出すことができないと思った。

助ける側は、体力・気力が大事だなと思った。

できる限り、ここにあるカードのことを地域で実践していこうかなと思った。

生きている間は、社会奉仕していきます。

自分が出来ない時は、素直に言えるようにし、助けてもらう。

助け合いゲームで、助けてもらうことだけではなく、理由も伝えることで、お互いの様子がわかることもあるという点が良いと思った。

「自分の弱さを出せるか？」という部分もあった。
ゲームという形であるため、伝えやすいと思った。

3 受援力とコミュニケーションのヒントについて

受援力とは、「助けを受け入れ、人を頼ることができる力」をいう。人に頼ることが苦手だとか、罪悪感を感じるとか、人に迷惑をかけられないといった理由で、誰にも相談できずにあきらめてしまう場合が多いが、「誰にも頼ることができない自分」から「ルールを守りつつ頼ってみてもいいかな?」「自分のできることで誰かの役に立ったらいいな」と、ほんの少し意識を変えてみることで生きやすくなるのではないか。

4 まとめ

お互い様で、無理のない範囲で自分にできることはたくさんある。それが大きく広がっていけば、地域にプラスの循環が生まれてくると思う。近くで助け合う「近助」という表現もあります。自助、互助、共助、公助の順番をふまえた上で、互助の部分の地域での支え合い、助け合いを行うことで、より暮らしが豊かになり、生きがいや生きる喜びにも繋がるのではないかと思う。各自が地域に持ち帰り、実践していただければと思う。

発表会・講評

それぞれの分科会で行った内容や参加者から出た意見などを発表していただいた後、高山氏から講評をいただきました。



第1分科会

発表者：高橋実行委員

第1分科会は3名のコメンテーターの方から発表していただいた。

はばたき福祉園の堀越課長のお話から紹介させていただく。

知的障害、重度の障害を持つ方が多く、一番困ることがやはりコミュニケーションをとれないこと。それから意思を示さない人や発信しない人が多いということ。対応としては一緒に生活することで見えてくるものがあるので、じっくりとそれを見て、対応していくことが一番大事ということである。

支援者として大切なことは、「その人のことはその人でないとわからない」ということを決して忘れないということだ。

それから知的障害を持つ方は怖いというイメージを持たれがちだが、その人のことを考えることによってそうした誤解も軽減されるので、じっくりとつき合ってほしいということ。それから障害だけを見ないで、その人の個性、個人を見ていただきたいということである。

次に、聴覚障害を持つ庄司さんのお話から。

聞こえないと言ってもいろんな人がいる。庄司さんの場合は、2歳の時に中耳炎で全く耳が聞こえなくなってしまった。小学校から手話が始まり、中学で指文字を知ることができたが、会社に入ってから口話で伝わらない。伝わらないことを知ったので、会社の手話サークルに入ったりしていた。手話が難しい人でも、筆記をしていただければ意思の疎通ができる。それから今はスマホがあるのでとても便利になった。それでどこでも誰とでも手話でつながれる社会になって欲しいというのが希望である。

最後に精神障害家族会の三浦さんのお話から。

家族会を長く運営されていて墨田作業所を立ち上げた。それは精神障害である姉さんと弟さんの発病がきっかけであった。精神障害者への偏見がやはりどうしてもある。先ほどはばたきの堀越課長からも怖いという偏見がどうしてもあるという話があった。じっくりつき合っていて理解し

てもらいたい。

次に3人のお話が終わって意見交換や質問等を行った。

それぞれの障害のある方とのコミュニケーションのとり方を教えてほしいという質問があった。堀越課長からは時間をかけ、丁寧な対応をしてほしいという話が合った。また精神障害があることを隠したがる人がいるので、それを理解し、時間をかけて話して欲しいというお話があった。

そして庄司さんからは、手話ができなくても、筆談で対応していただけると助かるという話があった。

それから視覚障害のある方から、ATMの映像やタッチパネルがすごく困るという意見が出た。

しかし最近は手伝いましょうかと声をかけてくださる方が増えて、それはありがたく思っている。障害を持っている方でも助けたいという気持ちもあるので、お互いに助けたり助けあったり、そのコミュニケーションをとれたら素晴らしいと感じた。

高山氏

今回のフォーラムは「墨田区手話言語及び障害者の意思疎通に関する条例」が施行されたことを受けてテーマが検討されたということだが、障害のある方々が普段どんなことに困っているのかを理解したり、それぞれ解決していくためにどんな方法があるのかを考えたりするには、じっくり丁寧に時間をかけて、話を聞くことであるという話があった。

またどういうふうに思っているのかわからない人でも、じっくりその人と関わっているうちに、だんだん行動の背景がわかっていくという話があった。

まずはじっくり関わるということが大事で、様々な障害の方と接する場合に共通していることが分かった。

また障害を持っていても、それぞれが誰かの役に立ちたいという気持ちを持っているという話がとても大事なところだと感じた。

去年、広島県の土砂災害の現場に入っていたが、聴覚障害をお持ちの方が土砂の撤去の活動に来てくださり、僕は耳が聞こえないが、力を貸すことができると関わってくださった。みんなそういう気持ちを持っている。その方は、避難の時はやはり情報取得が難しく、いろんな人に助けてもらった。その分、復旧のタイミングでは自分にできることがあるのではないかと申し出てくれた。誰かが苦手なことを誰かがカバーしていく、これは障害をお持ちの方だけではなく、多くの方に共通しているのではないかと思う。

第2分科会

発表者：墨田区社会福祉協議会 杉山氏

日本語ボランティア21の松本氏のお話の中で「やさしい日本語」という言葉をご紹介いただいた。やさしいというのは「優しい」と「易しい」という二つの意味が込められている。

外国人が住みやすいまちは日本人も暮らしやすいまちはないかというお話があった。

次に、日本で暮らす外国の方々からお話をいただいた。皆さんがまず日本に来て感じたことは、言葉の難しさや、心細さ、寂しさなど。日本語教室で日本語を学ぶ中で、様々なことを支えあえる仲

間ができた。また子どもが学校に通うことで、PTA活動などを通じて一つの繋がりができたという話があった。

皆さんご自身が受けた親切を何らかの形で恩返ししたいという思いも聞かせていただいた。

その後のグループディスカッションでは、やさしい日本語とはどういうものかという話があった。例えば「これはさっき私がコンビニで買った水です。」という文について、やさしい日本語ではこれを「私が買いました。」「これは水です。」「コンビニでさっき買いました。」というような短文で伝えるということ。「はっきり」「最後まで」「短く」ということで「はさみ」というふうにご紹介いただいた。

また他のグループでは、子どもたちにもコミュニケーションをとるための教育が必要ではないかという意見が出た。さらに外国の方々には日本語を教えてほしいという思いが強い。外国の言葉が話せなくても、少しでも日本語を教えるという意味で協力できる方がいればどんどん手を挙げてほしいという要望があった。折り紙を一緒に折るだけでも気持ちが通じ合える。

最後に漢字にふりがなをふっていることが多いが、ひらがなでも難しいため、ローマ字もふって頂きたいという意見があった。

高山氏

分科会話を聞いていたが、ご自身が苦労された方もユーモアを交えて楽しく話してくださり、話に引き込まれた。国籍や言葉の違いを認め合い、暮らしていることが伝わってきた。また今後多くの外国人の方が観光で日本を訪れたり、仕事をされたりと様々な形で関わる機会が増えると思う。外国人の方々が暮らしやすいまちになっていけば、きっと日本に定着してくれるだろうし、その結果日本は暮らしやすいまちになるのではないか。日本語を教えてあげるだけではなく、広い意味で外国人の方が暮らしやすいまちを作ることが大切であると感じた。

それから「はっきり」「最後まで」「短く」伝える「はさみ」について、今後の参考にしたい。

第3分科会

発表者：墨田区社会福祉協議会 小古山氏

第3分科会では、地域の中でお互い様の関係で、自分たちに何ができるのかということをお互いと一緒に考えた。具体的には、「助け合い体験ゲーム」を活用してご近所の助け合いを体験した。これは自分がやって欲しいことをグループの他の参加者の方に説明し、やってくれる人を募るゲームである。このゲームを通して、自分が助け上手か助けられ上手なのかということも体感した。ゲーム後の振り返りでは、困っていることを具体的に伝えることはすごく難しいが、大切であるという話があった。また「はい。やります」というふうに手を挙げてもらえると、こんなことでも頼んでいいのかということが分かったり、「やります」と言ったことにより自分の得意なことに気が付いたりしたという意見が出た。また普段から近所づきあいができていなければ、助け合いの一步を踏み出すのは難しいという意見や、なかなか「助けて」というのは難しいので助けられる練習をする必要があるという意見なども見受けられた。そのほか、助けてもらうことだけでなく、その理由を伝えることで、お互いの状況がわかるというよさもあるとの意見や、人にお願いすることは自分の弱さを出さなければいけないという側面もあるという意見もあった。

ゲーム終了後、受援力とコミュニケーションのヒントについて話をさせていただいた。

最後に、多くの方が今日からお互い様でできることを「誰かのため」に「自分のため」に、「未来の子供たちのため」に、それぞれの地域で実践をしていきましょうという話を共有した。

高山氏

講演の中でも少し話をさせてもらったが、困っていることを一つ伝えることってなかなか難しい。困りごとの中には、みんながいるところでみんなで解決できることもあれば、個人のプライベートの部分にまで入り込まないと解決できないものもあり、なかなか難しい問題もある。

全体を通して、墨田の人は、自分のことと他人のことに踏み込んでいく力、おせっかいの力がとても強いと感じた。

これは大切な財産であるので、ぜひ大事に育てて欲しい。

元気で明るくて、人が困っていることを他人ごとにしらない力をお持ちの皆さんだった。墨田のことを他の地域にも伝えたい。今日はありがとうございます。

その他

1 準備会の開催

「すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会」の設置前に、準備会を行いました。

(1) 第1回

日時：平成31年3月6日(水)10時から

会場：墨田区役所 31会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムスケジュールの検討等

(2) 第2回

日時：平成31年3月27日(水)10時から

会場：墨田区役所 31会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムテーマの検討等

2 実行委員会の開催

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムの企画・運営のために、「すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会」を設置しました。

(1) 第1回

日時：平成31年4月9日(火)10時から

会場：墨田区役所 31会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム内容の検討

(2) 第2回

日時：平成31年4月24日(水)10時

会場：墨田区役所 31会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム内容の検討、チラシについて

(3) 第 3 回

日時：令和元年 5 月 1 4 日 (火) 1 0 時

会場：墨田区役所 3 1 会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム内容の検討、チラシについて

(4) 第 4 回

日時：令和元年 6 月 1 2 日 (水) 1 0 時

会場：墨田区役所 6 2 会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム内容の検討

(5) 第 5 回

日時：令和元年 7 月 2 日 (火) 1 0 時

会場：墨田区役所 8 1 会議室

議題：すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム直前の確認

3 実行委員

五十嵐美奈、内田正代、片渕淳子、鎌形由美子、栗田陽、佐藤幾洋子、清水幸人、
須藤浩司、須藤正、高橋早苗、頭金多絵、前田恵子 (敬称略、五十音順)

4 広報

区民に広く参加を呼びかけるため、次の事業 P R を行いました。

墨田区のお知らせ (6 月 2 1 日号) 、すみだ社協だより (6 月号) 、区 H P 、墨田区社会福祉協
議会 H P 、チラシ・ポスター配布 (区施設、町会、図書館等) 、 S N S (区公式ツイッター・
Facebook) 等